

本論文は、一続きの物を分断する「切る・割る」事象を取り上げ、日本語・韓国語・中国語の「切る・割る」事象の語彙カテゴリー化の異同を解明し、L1 と L2 が類似の特徴を持つ上級日本語学習者 (KJL) と L1 と L2 が異なる特徴を持つ上級日本語学習者 (CJL) を対象に日本語の「切る・割る」事象の語彙カテゴリーの習得における学習者共通の特徴と L1 の影響について検討した。日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者、KJL、CJL に口頭産出実験を行ない、それぞれの対象者群の語彙カテゴリー化の特徴を「語彙数」、「語の使用範囲」、「語の使い分け方」の 3 つの側面から分析した。その結果、L2 語彙カテゴリーの習得について、以下のようなことが明らかになった。

第一に、「語彙数」について、JNS は KNS と CNS より「切る・割る」系動詞の語彙数が少なく、日本語の「切る・割る」事象の語彙カテゴリーが最も単純である。しかし、両学習者共通の特徴として、使用範囲の広い語の過剰使用と特定の場面にしか使われない語の過剰使用が見られたため、産出語彙数は同程度であり、JNS より語彙数が少なかった。つまり、語彙数においては、L1 の語彙カテゴリーの細分化の程度による影響が見られなかった。

第二に、「語の使用範囲」には、L1 の対応語による影響が見られた。また、学習者は L2 の中の使用範囲の広い語の過剰使用以外に、L1 の中の使用範囲の広い語の L2 対応語の過剰使用も見られ、L1 の使用範囲の広い語は L2 に転移しやすい可能性があることが示唆された。

第三に、「語の使い分け方」において、学習者は日韓中で共通する語を使い分ける際の大まかな分類基準 (すなわち、裁断面の予測可能性の高低) はよく習得していたが、L2 の細かい語彙カテゴリーの習得はあまり進んでおらず、どちらの学習者も L1 の語の使い分け方の影響を受けていた。また、「割る」系動詞の使い分け方については、CJL は L1 と L2 とで動詞で表す事象の側面が異なっているため、KJL より習得が遅れていた。

L1 と L2 の語彙カテゴリーの異同が学習者の習得に与える影響に関しては、Pavlenko (2009) で提唱している修正階層モデルの仮説を支持する結果が得られた。具体的には、L1 と L2 の大まかな分類での共通のカテゴリーは、L1 の正の転移により、学習者にとって習得されやすかった。L1 と L2 のカテゴリーが部分的に共通している場合、L1 の影響が見られ、共通する部分に関しては、正の転移、相違する部分に関しては、負の転移が見られた。また、L1 に L2 と対応する語彙カテゴリーが存在しない場合、習得が非常に困難であることが明らかになった。

本研究で得られた新たな知見としては、L1 と L2 の「語彙数」、「語の使用範囲」、「語を使い分ける基準」の 3 つの側面における異同の中で、「語彙数」の影響が最も小さく、「語を使い分ける基準」の影響が最も大きいことが明らかになった。